

## てんたかく

収量構成の目安 (600kg/10a)

収量構成	目安	収量構成	目安	収量構成	目安
㎡当たり穂数(本)	500	㎡当たり籾数(粒)	30,000	玄米千粒重(g)	23.5
一穂籾数(粒)	60	登熟歩合(%)	85		

4月
5月
6月
7月
8月
9月

育苗期
5/5 田植え
活着期
有効分げつ期
無効分げつ期
6/27 幼穂形成期
穂ばらみ期
7/18
登熟期
8/23
成熟期

葉色の推移 (葉色カラースケール) 4.0 幼穂形成期 4.0~4.5 穂期 4.2~4.5

4.0を下回らない

5/5 田植えの場合

浸種 3/31 播種 4/12 搬出 4/15

5/5 田植え → 5/24~26 溝掘り → 5/31~6/5 中干し → 6/27 加肥 → 7/7 穂肥① → 7/15 穂肥② → 7/18 出穂期 → 8/16~18 落水 → 8/23 刈取り

一斉草刈り

品質向上は「土づくり」から

資材名	標準施用率(kg/10a)
粒状ケイカル	200
元	100
シリカロマン	100
シンキョーライトP	100

■秋耕の実施  
稲わらは秋のうちに5~10cm程度浅めにすき込む

**管理のポイント**

- 土づくり**
  - 稲わらの腐熟促進のため、秋耕しを行い、排水溝を掘る。
  - 土づくり資材や堆肥を施用する。
- 健全な乾燥調製**
  - 1.9mmのふるい目を使用し、選別を徹底する。
  - 水分14.5~15.0%に仕上げる。
- 適期収穫**
  - 籾の黄化率85~90%程度で適期に刈り取る。
  - フェーン時はあらかじめ入水する。
  - 刈取り予定日の5~7日前まで間断かん水を行う。
- 収穫までの水管理**
  - 生育ステージに合わせて防除を実施する。
- 出穂後20日間の湛水管理**
  - 1回目は出穂後20日
  - 2回目は穂揃期
  - 3回目は傾穂期
- 防除の徹底 (3回必須)**
  - 1回目は出穂後20日
  - 2回目は穂揃期
  - 3回目は傾穂期
- 草刈りの徹底**
  - 7月上旬までに畦畔や雑草地の草刈りを終える。
  - 葉色が淡い場合は、出穂前に追加穂肥を施用する。
  - 2回目穂肥は1回目穂肥から10日後を目安に施用する。
  - 1回目穂肥は幼穂長1~2mmと葉色を確認してから施用する。
- 中干し後は幼穂形成期まで間断かん水**
  - 6/20頃に「エスアイ加量」または「珪酸加量」を施用する。
  - 中干しは強すぎないように注意する。
  - 田植え後4週間までに開始する。
- 中干しは適期に開始**
  - 5mに1本を目安に溝を掘る。
  - 溝掘りは確実に
  - 活着後は、浅水管理をする。
- 溝掘りは確実に**
  - 溝掘り深さは3cm。
  - 植付本数は株当たり3~4本。
  - 栽植密度は坪当たり70株を確保する。
  - 苗箱施薬による防除を実施する。
  - 基肥は基準量を守る。
- 田植え**
  - 搬出直後から換気の徹底。
  - 田植時期に応じた計画的な育苗を行う。
- 健苗育成**
  - 代かきは、均平に努め、練りすぎに注意する。
  - ゆっくりと耕起し、作土を15cm以上確保する。
- 耕起・代かき**
  - 確実に施用する。
  - 秋施用できなかった場合は、土づくり資材を
- 土づくり**
  - 確実に施用する。
  - 秋施用できなかった場合は、土づくり資材を

### 適期中干し開始・適度な中干し実施

○ 田植え1か月(8葉期頃)は、最も根が伸びる時です。この時期に中干しをすることで、根の伸長を促進します。

○ 中干しの効果を高めるため、中干し前には溝掘りを確実に実施しましょう。

適期中干し

● 葉が直立  
● 葉が太い  
● 根量が多い

中干し未実施

● 下葉が枯れる  
● 葉が細い  
● 根量が少ない

中干しの有無による根の姿 兼用管理機での溝掘り

### 防除の徹底で被害を防止!!

○ 防除は適期に行い、防除間隔は7日間を目安とする(10日以上あげない)。

○ 畦畔等のイネ科雑草の穂が出る前までに草刈りを行う。

○ 麦と同等の不作付地は、大豆、園芸作物、緑肥等の栽培を行う。

**病害虫防除体系** (育苗基本防除) ・ 苗箱施薬剤は、規定の量(50g/箱)を厳守し、箱全体に均一に散布する。

薬剤名	散布量	使用時期	対象害虫
ルーチンアドスピノ箱粒剤	50g/箱	播種時(覆土前)~移植当日	白葉枯病、もみ枯病、イネシロアワビ、イネヒメハモグリハ、イネノミダシ、ツマグロヨコバイ、コナメイト、コナメイト、イネヒメハモグリハ、フタオビコバ、コノメイト、イネノミダシ
ブイゲットバディート粒剤	50g/箱	緑化期~移植当日	いもち病、白葉枯病、もみ枯病、イネシロアワビ、イネヒメハモグリハ、フタオビコバ、コノメイト、イネノミダシ
エパーゴルフワイド箱粒剤	50g/箱	播種時(覆土前)~移植当日	穂枯れ(こま葉枯病)、白葉枯病、内臓病、イネノミダシ、イネシロアワビ、ツマグロヨコバイ、コナメイト、コノメイト、イネヒメハモグリハ、フタオビコバ、イネノミダシ

※各薬剤とも、使用時期別に、上記以外の対象害虫の登録があります。

### 除草剤散布は遅れずに

雑草の発生が少ない圃場：一発処理

**カチボン**  
・1キロ粒剤51・Lジャンボ

使用時期：移植時~ノビエ2.5葉期

**アピログロウMX**  
・1キロ粒剤・ジャンボ

使用時期：移植後3~12日~ノビエ2.5葉期

**エンペラー**  
・1キロ粒剤・豆つぶ250

使用時期：1キロ剤：移植時~ノビエ3.0葉期  
豆つぶ剤：移植後~ノビエ3.0葉期

雑草が残った場合

**ノビエが残った場合 クリンチャー 1キロ粒剤**

使用時期：1kg/10a 施用：移植後7日~ノビエ4.0葉期  
1.5kg/10a 施用：移植後25日~ノビエ5.0葉期

**トドMF 1キロ粒剤**

使用時期：移植後14日~ノビエ5.0葉期

広葉雑草が残った場合

**バサグラン粒剤**

使用時期：移植後15~5日

**ノビエ・広葉雑草どちらにも効果有**

**トドMFMF粒剤**

使用時期：移植後15日~ノビエ6.0葉期

※赤字の薬剤は令和4年度新規採用薬剤

雑草の発生が多い圃場：体系処理

**体系①：ノビエ対策**

**マーシエット**  
・1キロ粒剤

使用時期：移植後3~5日~ノビエ1.0葉期

**体系②：ホタルイ対策**

**ピラクロン**  
・1キロ粒剤

使用時期：移植時同時使用

**体系③：初期剤+中期剤**

**ピラクロン**  
・1キロ粒剤

使用時期：移植時同時使用

いずれか1剤

**ワイドショット**  
・1キロ粒剤

使用時期：移植後15日~ノビエ4.0葉期

**サンパンチ**  
・1キロ粒剤

使用時期：移植後15~30日~ノビエ3.0葉期

### てんたかく 基本防除

防除時期	出穂前	穂期	傾穂期
粉剤	バリダシヨーカー粉剤 DL 4kg/10a (収穫14日前まで)	ラプサイドキラップ粉剤 DL 4kg/10a (収穫14日前まで)	スタークル粉剤 DL 3kg/10a (収穫7日前まで)
液剤	バリダシヨーカー液剤 5,000倍 (収穫14日前まで) MR.ジョーカー-EW 2,000倍 (収穫14日前まで) 使用液量：150ℓ/10a	ラプサイドフロアブル 1,000倍 (収穫7日前まで) キラップフロアブル 1,000倍 (収穫14日前まで) 使用液量：150ℓ/10a	スタークル液剤 10,000倍 (収穫7日前まで) 使用液量：150ℓ/10a
対象害虫	ウンカ類、ツマグロヨコバイ、カメムシ類、紋枯病等	いもち病、カメムシ類、ウンカ類	カメムシ類、ウンカ類、ツマグロヨコバイ

### てんこもり 基本防除

防除時期	出穂前	穂期	傾穂期
粉剤	バリダシヨーカー粉剤 DL 4kg/10a (収穫14日前まで)	ラプサイドキラップ粉剤 DL 4kg/10a (収穫14日前まで)	スタークル粉剤 DL 3kg/10a (収穫7日前まで)
液剤	バリダシヨーカー液剤 5,000倍 (収穫14日前まで) MR.ジョーカー-EW 2,000倍 (収穫14日前まで) 使用液量：150ℓ/10a	ラプサイドフロアブル 1,000倍 (収穫7日前まで) キラップフロアブル 1,000倍 (収穫14日前まで) 使用液量：150ℓ/10a	スタークル液剤 10,000倍 (収穫7日前まで) 使用液量：150ℓ/10a
対象害虫	紋枯病	いもち病、カメムシ類、ウンカ類	カメムシ類、ウンカ類、ツマグロヨコバイ

## てんこもり

収量構成の目安 (600kg/10a)

収量構成	目安	収量構成	目安	収量構成	目安
㎡当たり穂数(本)	450	㎡当たり籾数(粒)	31,000	玄米千粒重(g)	22.5
一穂籾数(粒)	70	登熟歩合(%)	85		

4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月

育苗期
5/10 田植え
活着期
有効分げつ期
無効分げつ期
7/17 幼穂形成期
穂ばらみ期
8/9
登熟期
9/21
成熟期

葉色の推移 (葉色カラースケール) 4.0 幼穂形成期 4.0~4.5 穂期 4.2~4.5

4.0を下回らない

5/10 田植えの場合

浸種 4/8 播種 4/18 搬出 4/21

5/10 田植え → 5/29~31 溝掘り → 6/5~10 中干し → 7月上旬 一斉草刈り → 7/15 穂肥① → 7/25 穂肥② → 8/9 出穂期 → 9/14~16 落水 → 9/21 刈取り

品質向上は「土づくり」から

資材名	標準施用率(kg/10a)
粒状ケイカル	200
元	100
シリカロマン	100
シンキョーライトP	100

■秋耕の実施  
稲わらは秋のうちに5~10cm程度浅めにすき込む

**管理のポイント**

- 土づくり**
  - 稲わらの腐熟促進のため、秋耕しを行い、排水溝を掘る。
  - 土づくり資材や堆肥を施用する。
- 健全な乾燥調製**
  - 1.9mmのふるい目を使用し、選別を徹底する。
  - 水分14.5~15.0%に仕上げる。
- 適期収穫**
  - 籾の黄化率85~90%程度で適期に刈り取る。
  - フェーン時はあらかじめ入水する。
  - 刈取り予定日の5~7日前まで間断かん水を行う。
- 収穫までの水管理**
  - 生育ステージに合わせて防除を実施する。
- 出穂後20日間の湛水管理**
  - 1回目は出穂後20日
  - 2回目は穂揃期
  - 3回目は傾穂期
- 防除の徹底**
  - 1回目は出穂後20日
  - 2回目は穂揃期
  - 3回目は傾穂期
- 草刈りの徹底**
  - 7月上旬までに畦畔や雑草地の草刈りを終える。
  - 葉色が淡い場合は、出穂前に追加穂肥を施用する。
  - 2回目穂肥は1回目穂肥から10日後を目安に施用する。
  - 1回目穂肥は幼穂長1~2mmと葉色を確認してから施用する。
- 中干し後は幼穂形成期まで間断かん水**
  - 6/20頃に「エスアイ加量」または「珪酸加量」を施用する。
  - 中干しは強すぎないように注意する。
  - 田植え後4週間までに開始する。
- 中干しは適期に開始**
  - 5mに1本を目安に溝を掘る。
  - 溝掘りは確実に
  - 活着後は、浅水管理をする。
- 溝掘りは確実に**
  - 溝掘り深さは3cm。
  - 植付本数は株当たり3~4本。
  - 栽植密度は坪当たり70株を確保する。
  - 苗箱施薬による防除を実施する。
  - 基肥は基準量を守る。
- 田植え**
  - 搬出直後から換気の徹底。
  - 田植時期に応じた計画的な育苗を行う。
- 健苗育成**
  - 代かきは、均平に努め、練りすぎに注意する。
  - ゆっくりと耕起し、作土を15cm以上確保する。
- 耕起・代かき**
  - 確実に施用する。
  - 秋施用できなかった場合は、土づくり資材を
- 土づくり**
  - 確実に施用する。
  - 秋施用できなかった場合は、土づくり資材を

◎ 高品位・低コスト生産にコントリビューターを積極的に利用しましょう!